毎日新聞
2012.2.14

赤坂電視台

酒豪は郷里の伝統

BS―TBSバラエティー「吉田類の酒場放浪記」（月曜後9・0）出演

「自由奔放な酔いっぷり、いいですね」なんて声を掛けられることがある。番組の中の僕を見てのことに違いない。ありがたいファンの言葉ながら、少々照れくさい。というのも、飲めば崩れてゆくほかない酔っ払いのさだめ、お許しいただくほかない。

高知県の郷里には、婚礼の宴を二、三昼夜かけて催す風習があった。そのせいか酒宴を神事とさえ思っていた。勇壮な酒豪ぶりを表す〝鯨海酔侯〟（げいかいすいこう）を名乗ったのは幕末の土佐藩主、山内容堂だった。僕の主宰する俳句会で「容堂が酔ってそうろう菊の酒」と詠んだメンバーがいた。大方の期待を裏切って、作者が中1の少年と判明するや、会場は爆笑の渦。坂本竜馬をはじめ維新で活躍した幕末藩士たちの会合は、おおむね酒席かのごとくに伝わる。してみれば、明治維新の一翼を担ったのは、お酒かも……。

吉田類①

毎日新聞
2012.2.15

赤坂電視台

世界に誇れる酒場

BS―TBSバラエティー「吉田類の酒場放浪記」（月曜後9・0）出演

酒場放浪記の地方ロケも北は北海道の稚内から、南の果て沖縄の波照間島、与那国島へと足を延ばすことができた。もちろん、番組で日本列島の全県を縦断したわけじゃないが、ちょっとした達成感を覚える。

近年、番組のファン層に変化が起きている。どうやらインターナショナルな人気を獲得しつつあるようだ。韓国、上海といったアジア圏だけでなく欧米人にも静かなブームだと聞かされた。もしそうなら、外国人の目にも日本の居酒屋は癒やしと映るのだろう。酒場でほろ酔う女性の笑顔は、平和な街の象徴かもしれない。来日した欧米女性らが、治安のよさに驚くという。東京下町の大衆酒場で、子供連れの若夫婦がモツ肉の煮込みやおでんをツマミに飲み食いする光景は珍しくない。このこまやかな安らぎを目指す庶民酒場こそ、列島の自然環境や水と同じように世界へ誇っていい。

吉田類②

毎日新聞
2012.2.16

赤坂電視台

シメの一句に思い

BS―TBSバラエティー「吉田類の酒場放浪記」（月曜後9・0）出演

番組は、店への一句を詠ませていただくことで締めくくる。俳句の世界で言う〝あいさつ句〟だ。店主を含め偶然隣り合わせた美女や、その日に供された旬の食材などがテーマとなる。

新宿から程近い、私鉄沿線駅のそばにある古い居酒屋でのことだった。「番組のシメに詠む一句、良いですね」と、中年女性からビールを勧められた。女性は福島原発からの避難者で、東京の娘さん宅へ身を寄せているという。旅日記のつもりで詠んだほろ酔い俳句が、心のほころびに役立てたならうれしい。

俳句で印象深い地方ロケのひとつに、芭蕉の「奥の細道」をなぞる旅があった。白河関、仙台、山形へと北上し、日本海沿いの象潟、中山温泉を経て大垣までの道のり。時空を超えた芭蕉の後ろ姿が見え隠れしていた。新たな発見は、別れの喪失感を埋めてくれる。だから酒場放浪が続く。

吉田類③

毎日新聞
2012.2.17

赤坂電視台

酒が結ぶ俳句の縁

BS―TBSバラエティー「吉田類の酒場放浪記」（月曜後9・0）出演

「もう、放浪なんてありえませんよ」。2年ほど前、神保町の、とあるバーカウンターで小耳に挟んだ。交通手段の発達した現代では、かつてのような漂泊の詩人など存在しない、との意味だろう。同じ年、番組ロケの高知県編で立ち寄った故郷は、生育した50年杉で跡形もなく埋もれていた。少年期から始まった空白の半世紀、僕には〝漂泊〟以外の言葉が見つからない。

相前後して、離村の際に母が地元へ残した惜別の句「ふる里を捨てるに非ず寒椿」を、同郷の見知らぬ老紳士より告げられた。そして昨年、北海道のサロマ湖畔で100年も続く地元・常呂町俳句会のメンバーたちと吟行を催した。後の酒席、なんと明治期に常呂町を開拓したのは、母や僕と同じ俳句ルーツと思われる高知県佐川町からの入植者と判明。半世紀を経て、酒が俳句の縁を結んだ。（来週は松本あゆ美さんです）

吉田類④